

I. 「東日本大震災における昭和大学医療救援活動の記録」 発刊にあたって

学校法人昭和大学理事長 小口 勝司

東日本大震災により被災された皆様には心よりお見舞いを申し上げます。皆様の安全と一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

ご存じの通り、平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に、宮城県沖を震源に、我が国観測史上最大の大地震が発生致しました。地震の被害はもとより、津波による被害や、電子力発電所損壊に伴う放射能災害にも事態は及びました。

被害が詳らかになる中、阪神・淡路大震災の経験を踏まえて、医系総合大学ができる最大限の支援活動を行うために、医療救援活動を直ちに行うことと致しました。

今回の医療救援活動に際しまして、2つの大きな点を考慮に入れて活動を致しました。

一つ目は迅速性です。地震発生後、直ちに DMAT を宮城県に派遣致しました。ここでは傷病者の治療やトリアージ、域内転院搬送等に従事しました。また、本学独自に、3 月 15 日には「昭和大学医療救援隊」を組織し、第 1 陣 14 名が被災地に向け出発致しました。円滑に人選・準備が行われ、迅速に出発できたものと思っております。この救援隊は第 7 陣まで延べ 107 名が救援活動に携わり、これは質量ともに他の追隨を許さないものであると思われま。

二つ目は、昭和大学全体としての救援活動を実施する、ということです。今回の救援隊は、志ある参加者を学内全体からの公募制とし、これにより 200 名余りの職員が学部・所属の枠を超え、瞬間に集まりました。また、在学生自身もその思いを揺り動かされ、救援隊への参加、或いは救援隊の後方支援活動やボランティア活動と、幅広く活動しました。その数も 150 名を数えます。チーム医療を実践する本学として、昭和大学全体としての活動が実現できたことは、大いに評価されるものであり、私は誇りに思います。

このように、全学を挙げて救援活動を行い、出来る限りの支援を行うなか、「至誠一貫」の精神が職員全体に脈々と受け継がれていることを確信致しました。

そのほか、各団体からの依頼により派遣した医師団・医療班は産婦人科領域・整形外科領域・救急医学領域・精神神経科領域、また、放射線技師として、ソーシャルワーカーとして、薬剤師として、様々な被災地に赴き、活動を行いました。このような諸活動にも「至誠一貫」の思いは息づいているものと思います。

この記録は、本学が行った医療救援活動を報告書として纏めたものです。ご一読頂き、本学の精神の一端を窺い知って頂くことが出来れば幸いです。